エイズ通信　Vol.18　福島県医療ソーシャルワーカー協会

平成 29 年 10 月 21 日、東北ブロック HIV/AIDS 心理・福祉連絡会議が開催されました。毎年開催されるこの連絡会議には、エイズ拠点病院に所属する当協会会員も参加しています。今年は、本会議に合わせ薬害被害者支援担当者会議も開催され、薬害被害者の現状と求められる支援について知る貴重な機会となりました。

薬害被害者支援担当者会議に参加して

太田西ノ内病院　伊藤侑花

仙台医療センターで行われた『薬害被害者支援担当者会議』に参加しました。

血友病や HIV の治療は一生であり、薬害被害者の高齢化も進んでいるため、医療だけではなく福祉の対応も今まで以上に必要になってきているとのことです。また、国が認めた薬害ということからも様々な面での救済や支援などの対応は絶対的に必要であり、薬害被害者は国にとっても特別な存在であるとのことでした。そのことからも薬害被害者は国だけではなく医療や福祉などに対しての期待感が大きく、また治療によって薬害被害を受けたということからも医療者に対しての不信感が強くあるということを知りました。

また、薬害被害者は支援者に対し『言葉にして何ができるのかを明確にして欲しい』、『自分達と一緒に今ある課題や問題を考えて欲しい』などの思いがあることも知ることができました。それぞれの思いをしっかりと聴き、共に問題や課題を共有し、必要な対応を考えていくことが薬害被害者への支援には必要なのだと思いました。

現在でも薬害被害者やその家族は地域や世間から孤立している状況があり、問題を抱えていても自ら助けを求めることや必要な支援を受けることが難しい環境にいるとのことでした。長期的な治療や高齢化により今までとは違った問題が今後出てくることを考えると、それぞれが抱えている問題を明確にし、必要な支援につなげるために薬害被害者やその家族との関わりを持つことがまずは必要になるのではないかと思います。そのきっかけとしてソーシャルワーカーが自ら積極的に会いに行き声をかけることができれば、薬害被害者やその家族のこれからの生活も変わってくるのではないかと思いました。

東北ブロックＨＩＶ/ＡＩＤＳ　心理・福祉連絡会議に参加して

太田熱海病院　石川　詠美子

東北ブロックＨＩＶ/ＡＩＤＳ福祉・心理連絡会議では、国立国際医療研究センター田沼医師や九州医療センター臨床心理士の辻氏の講演の他、分科会にて症例検討を行いました。

講演では、抗ＨＩＶ療法を常に見直す姿勢や努力が必要であることや、長期の耐用性・相互作用の少ないことが重要であることを知り治療法も進化し続けていることが分かりました。また、「もし私がＨＩＶに感染していると言われたら一番心配なこと」と投げかけられ、患者の気持ちを想像することで、まず私に出来ることは患者の気持ちに寄り添い、受け止め、理解することであると強く感じました。

分科会では、参加した各職種（外来看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカー（以下ＳＷ））それぞれの視点で、症例検討をしました。職種により課題と感じる視点が異なることが分かり、全体発表を通してＳＷとしてもっと気づけたのではないかと自身の視野の狭さを痛感しました。必要な社会資源に繋げようとすることばかりではなく、患者が置かれている状況や気持ちを受け止め理解しながら支援するということを忘れないよう意識したいと改めて思いました。

この会議に参加して、各拠点病院の現状や専門職の役割理解、自身の専門性の確認が出来ました。また、支援に取り組んでいる他機関の現状を知ることが出来ると同時に、まだまだ知識不足であることを思い知り、県や職種を越えて、顔の見える関係から必要時にお互いに助け合う横の繋がりも広がると改めて感じました。